
「ラヴ・ストーリーは突然に」(DCNバージョン)

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

「ラヴ・ストーリーは突然に」(DCNバージョン)

【Nコード】

N5989A

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

最近コナンの事が気になっている歩美は蘭に自分の恋の悩みを相談する。蘭のアドバイスは、コナンをデートに誘えとのことだった。そしてコナンをデートに誘ったその時に…

「ラヴ・ストーリーは突然に」(DCNバージョン)

春のある日のこと。毛利探偵事務所に一本の電話がかかってきた。「はい。毛利探偵事務所です。」

蘭が電話を取る。

「あ、もしもし。蘭おねえちゃんですか？」

「その声…歩美ちゃん？ どうしたの？」

「あの…その…、ちょっとおねえちゃんに相談したいことがあるんです」

「相談したいこと？ いったい何？」

「いや、電話じゃちょっと…」

「…わかったわ。じゃ、今からウチの下の『ポアロ』って喫茶店に来て」

「あ、それですけど…おねえちゃんひとりで来てください」

「ひとりで？」

*

喫茶店「ポアロ」。

窓際の席に蘭と歩美が向かい合って座っている。

「…すいませーん。ストロベリーパフェふたつお願いします」

蘭は注文を頼んだ。パフェとかはあまり好きじゃないのだが相手が遠慮するといけなかったので同じものを注文した。大体相手は小学生なのだ。

「で、何？ 相談って。」

「その…おねえちゃん、好きな人、っているんですか？」

「へ？」

「だから、その、好きな男の人、っているんですか？」

「…いるわよ。歩美ちゃんも知ってるでしょ？ 高校生名探偵の工藤新一を」

「おねえちゃん、彼が好きなんですか？」

「そうよ。カッコつけたがりの推理オタクだけど、いざ、っていうときは頼りになつて結構いいところあるんだ」

「…いいなあ。好きな人を口に出して言えるなんて」

「え？」

運ばれてきたパフエにも手を付けず歩美は

「…わたし、好きな男の子がいるんです。でも、その子はわたしのことが好きなのかどうかわからないんです。蘭おねえちゃんならこういう場合どうしますか？」

(歩美ちゃん、もしかしてコナン君のことを言ってるのかしら…)
そうとしか考えられない。蘭自身、何度も彼女を見てきているが、彼女が元太や光彦と接するときとコナンと接するときは何となく違う印象を受ける。思うに元太や光彦はタダのお友達、コナンはちょっと気になる男の子なのだろう。

(…でもまだ小学生よ。いくら今時の小学生といったってそんなに思い詰めたりはしないわよね…)

「…歩美ちゃん。それならその子の気持ち、確かめて見たら？」

「確かめる、って…」

「その男の子をデートに誘ってみたらいいんじゃない？ そうすればその子が歩美ちゃんのことを気にしてるかどうかわかるんじゃないかしら？」

*

日曜日。コナンが何か出掛ける支度をしている。

「どこ行くの、コナン君？」

「うん。何か歩美ちゃんが一緒に遊びたいから、日曜日に米花公園に来てくれ、って言うんだ」

(…歩美ちゃん、コナン君のこと言ってたのね)
蘭はそう直感した。あのあとおそらくコナンのことを誘ったのだろう。

(でも公園、っていうのがかわいらしいじゃない)

まだまだ歩美は子供である。

(…ったくよー。歩美のヤツ、なーに考えてんだか…)

コナンはそんなことを考えながら道を歩いていた。

(待てよ。ひよっとして歩美ちゃん、オレのこと好きなんじゃ…)

冗談じゃない。そんなこと蘭に知れたら一大事である。それに自分の正体が歩美に知れ

たとしたら、歩美にまで身の危険が迫る。

(…ふう。ガキの相手も楽じゃねーな…)

コナンは電気店の前を通り過ぎた。

「…次のニユースです。本日、杯戸町のパチンコ店に強盗が押し入り、現金500万円を奪って逃走しました。警察で行方を追ってます」

「杯戸町か…」

杯戸町と言ったら米花町の隣の町である。

*

米花町の公園。入り口にコナンが立って待っていた。と、

「ごめーん。コナン君、待ったー?」

歩美が思いつきりおめかししてコナンのもとにやって来た。

「いや、いま来たところだよ」

デートで待った男が使う常套手段である。実は早く来すぎて、缶ジュースを一本空けていたのだ。

「さ、行こう、コナン君」

歩美はコナンの手を引っ張った。

「あ、ああ」

そして歩美とコナンは公園の中に入ってしまった。

(うまく行ってるみたいね)

ちよっと離れたところで物陰から覗いている人物がいた。蘭であ

る。コナンにわからないようにあとからついてきたのだ。ああいったことを言った以上、何か責任みたいなものを感じていたのだ。…と、自分と同じように物陰から覗いている二人組を見つけた。

(あれは…元太君に光彦君…)

やっぱりあの二人とは離れられないのか？

(はあ…。これじゃ何のためにアドバイスしたのかわからないわ…)

「歩美のヤツ、なんか様子が変わだと思ったら…コナンとデートしてたのか」

元太がつぶやく。

「そうですね。ボクたちを相手にしないで、コナン君とデートなんてズルイですよ」

光彦も賛同する。

「…とにかく、どこへ行くか、見てやるうじゃねーか」

しかし、元太たちの心配をよそにコナンと歩美は何もするわけもなく、ただ黙って歩いているだけである。

「…なにやってんだ？ あの二人」

「ただ歩いているだけですわねえ…」

「そんなことオレだってわかるよ！」

*

不意に歩美が立ち止まった。

「あのね、コナン君」

「どうしたの、歩美ちゃん？」

「あのね。あのね、コナン君。わたし…わたし、コナン君のこと…」

そのときだった。

不意にガサガサッ、と音がすると、一人の男が飛び出してきて、歩美とぶつかった。

「キヤッ！」

歩美がすっ転んだ。

男は何やら鞆のようなものを持っていて、そのファスナーが歩美とぶつかった弾みでか開いてしまった。

中から札束らしきものが見えた。

「あ……」

それを見て絶句する歩美。

男は歩美を睨み付けると、片手に持っていたナイフを歩美に突きつける。

「ヒッ！」

「来い！」

それだけ言うと男は歩美の手を掴み、歩美とともにその場を走りだした。

「歩美ちゃん！」

「コナン君、助けてー！」

歩美が叫ぶがあつという間に歩美は連れ去られていってしまった。

コナンは当たりを見回すと、

「……元太、光彦！」

コナンは物陰に向かって叫んだ。

「ど、どうしてボクたちがいることがわかったんですか？」

光彦が物陰から出てきた。

「そんなことはどうでもいい。とにかく歩美が強盗にさらわれたんだ！ おまえ達は急いで警察を呼んで来い！」

「わ、わかった！」

そしてあたふたと二人は走っていく。

それを見送るコナン。

「……フツ、おまえらが尾行してたのは最初からわかってたぜ。すごい下手な尾行だったからな。木の陰から元太の大きな体が見えてたんだから」

そしてコナンは男が去った方向に向かって走っていく。

どのくらい走っただろうか、男の背中が見えてきた。やはり歩美という幼い少女を連れていいるからか思ったほど逃げることはできなかったようだ。

と、不意にコナンの隣を並走している人物がいた。

「蘭ねーちゃん!」

そう、歩美がさらわれたのを見て蘭もいても立ってもいられずに男を追いかけていたのだ。

「コナン君、ここは私に任せて!」

そう言つと蘭は男に追いついた。

蘭は右足を少し後ろに引くと回し蹴りを繰り出した。

(…決まった!)

蘭もコナンもそう思っただろう。

「…え?」

次の瞬間、蘭は絶句してしまった。

決まったかに思われた蘭の回し蹴りを男は反射的にであろうか、持っていた鞆で巧みに防いでいたのだ。

蘭はもう一度回し蹴りを繰り出そうとする。

すると、男は歩美を抱きかかえるようにして自分の目の前に出した。

(…まさか!)

男は歩美を盾にしているのだ、蘭はそう直感した。

「…う…」

蘭は空手の構えをしたまま動けなかった。

(…駄目…、このままじゃ何をしても歩美ちゃんに当たっちゃう…)

男を一撃で倒す自信はあるが歩美を巻き込むわけには行かない。

「…蘭おねえちゃん、助けて!」

歩美が目一杯涙を浮かべながら言う。

(…駄目だ、このままじゃ蘭も歩美ちゃんもあぶない…)

コナンも蘭が進退窮まったことを感じ取っていた。

(…まずいな、何とかしなきゃ…)

その時だった。いつの間集まったか野次馬の中にサッカーボールを持った少年がいたのをコナンは見つけた。

「ごめん、一寸借りるよ！」

そう言うとコナンはその少年からサッカーボールを取るとキック力増強シューズのパワーを上げる。

「蘭ねーちゃん、伏せて！」

コナンは叫ぶと同時にサッカーボールを蹴っていた。その声に気づいた蘭が慌てて身を屈める。

コナンの蹴ったボールは狙い変わらず、男の顔面を直撃した。

男がひっくり返る。

蘭は急いで駆け寄ると男の手から歩美を取り返す。

「歩美ちゃん、怪我はない？」

「う…うわ〜ん！ 怖かったよお〜！」

歩美は蘭に抱きつくと大声で泣き始めた。

「…よしよし、もう大丈夫だからね」

その後、元太と光彦の呼んだ警察の手によって男は連行されていた。

その帰り道のこと。

「ありがと、コナン君。コナン君のおかげで助かったわ」

歩美が話し掛ける。

「はは、大したことないよ」

「…それでね、コナン君。私、コナン君のこと…」

「…歩美ちゃん、今はその先は言っちゃダメだよ」

「え？」

「…もし、歩美ちゃんが1年経って同じ気持ちだったら、その時はその言葉の続きをボクに聞かせてよ」

「…うん」

歩美は小さく頷いた。

「ラヴ・ストーリーは突然に」(DCNバージョン)

歩美の気持ちは痛いほどわかる。しかし、歩美みたいな少女がそう簡単には言っちゃいけない言葉である事をコナンは知っている。だから、歩美に対してそういった態度を示すことが、コナン(と言うか新一)にとっての「大人の対応」である。

T H E E N D

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5989a/>

「ラヴ・ストーリーは突然に」(DCNバージョン)

2009年2月16日18時15分発行